

# 船 団

第111号

特集

本が好き、言葉大好き



## 赤石 忍

僕の椅子に誰かが座るレモン水  
左から見れば故郷は真夏なり  
夏空の隅からあららステゴザウルの脚  
不愉快なのね秋の隣に座っても  
汗たっぷりとかいたので虹を渡る  
珈琲はルンバで踊る穴惑い  
裏路地のうさぎマンシヨン星祭

## 赤坂 恒子

髪洗う今日の気分はフラッパー  
鯛のだしぬけに来て鳴き捨てる  
大夕焼砂山くずす波の音  
白シャツの背に「やればできる子です」ど  
捕虫網かぶる子も居り駅の騒  
雲の峰ここを左とナビが言う  
音たてて林間に入る炎暑かな

## ●会員作品●

## 秋月 祐一

引越しの荷ほどき遅々と棕櫚の花  
東京の右目のあたり蛇を踏む  
空梅雨や鍵ばかり売る古物商  
化石掘りしてゐる子らの夏帽子  
いつしんに泳いだあとのにしんそば  
夏座敷犬は平たくなつてゐる  
ポラロイド写真浮きでる我鬼忌かな

## 秋山 泰



母の日は母のいない日後妻の日  
壇蜜は館蜜より出で滴らず  
カズヒコもジョージもイサオもトコロテン  
梅雨はもうニツチもサツチもブルドッグ  
神々のサイコロキヤラメル五月来る  
事故現場トウモロコシが立っていた  
法律をまっすぐ犯すカタツムリ

朝倉 晴美

あつルビー谷に落としたプチトマト  
幼稚舎のオクラししとう背比べ  
反抗期今日もトマトは熟れすぎて  
ズッキーニ緑黄たわわ広島へ  
夏お座布数えて干してフルーツ皿  
相続の話西瓜に種多め  
ピン札を五十枚並べ稲光

朝日 泥湖

かたつむり拒むと決めてペンを措く  
青岬おおきな昼に出会う旅  
裸婦像の体形昭和夏木立  
窓開けて夜風を探す俳句の日  
送り火や一筆箋に句を遺し  
星月夜裏の窓から家出する  
ウナギよりナマズ阪大より近大

● 会員作品 ●

あざみ

わかれましょ白粉花が邪魔でした  
息子とは親子の関係沈丁花  
木香薔薇入口ふさぐ軽き恋  
慈悲心鳥だまって腰に手を伸ばす  
あ・た・し失敗しない凌霄花  
マスカット・オブ・アレキサンドリアは本妻  
墜落って案外つらい寵馬

浅海 好美

過去未来曼珠沙華曼珠沙華  
大百足虫鳩寿二の母立ち向かう  
鶯の声調いし一草庵  
母鳩寿三西瓜苗二五〇本  
新樹光平和通一丁目  
蚊遣香くゆらせ遠来の客を待つ  
術後三年夫を誘う秋の浜

津波古 江津

ひとの性わらって泪ぐむあやめ  
梅青く水湧くように歳をとる  
土鳩も人も二足歩行で来る青葉  
家路ともちがう匂いの梅雨の星  
負けてまけてまけて大師の立葵  
いくつもドアー青水楢に会いにゆく  
太陽は音を立てずに藪枯し

坪内 稔典

君といて窓に山いる夏の朝  
旅の日の茅の輪くぐって海へ出て  
画架立ってウエリントンの夏の雲  
油蟬ばつか弟三回忌  
よく冷えたゼリー配られ三回忌  
秋晴れのポケモンGOの法隆寺  
天高くポケモンGOと子規さんと

## ● 会員作品 ●

鶴濱 節子

にんげんに原始の匂い玉の汗  
梅雨晴間赤ちゃん干して河馬干して  
空蟬は元素記号をもてあます  
それなりにねじれてひとり時計草  
そんなこと今言われてもはたた神  
ウミウシがめそめそしてる海の日よ  
山の日のカムイミンタラ眼下かな

寺田 伸一

向日葵は余所見が苦手まるで犀  
夕暮の駅舎にぼつり日傘おり  
友情がないぶん友達秋日傘  
パナマでも今は七月冥途でも  
風涼しこの頃毛深いチボの指  
善男善女あじさいだけが三室戸寺  
紫陽花のふゆりふゆりや寺の鐘

中居 由美

蜘蛛の囿の出来立てサンダルおろしたて

日雷革命というピアノ曲

水すまし兄の後ろに兄のいて

水星を蚩袋に入れ帰る

水着脱ぐ昆虫図鑑伏せたまま

白シャツと白Tシャツと蝉時雨

合歡の花赤子洗えばすぐ乾く

中谷 三千子

旧姓で便りをします更衣

昭和の日振っても下がらぬ体温計

噴水の横って一帯西東

秋立つ日写真も用意して並ぶ

二百十日賞味期限のせまる水

このあたり昔があったよねえ薄

屍理屈に合うも合わぬもねこじやらし

## ●会員作品●

長沼 佐智

守宮死ぬ名のない山を眺めた日

蔦茂るオルゴール探しに行くところ

夕立に逢う宝くじ買おうかな

一寸待ってと墨の香の夜の秋

耕衣忌や別の世界に一寸だけ

だんだんと若くなる父星祭

来てみればみんな迂回路座禅草

中原 幸子

初夏の東京ブギを足拍子

夏は夜ゼムクリップの大中小

グリーンカーテン秒針は秒忘れたか

わがルーツ西日の当たる鬼瓦

葛まんじゅうオリソピックが始まった

約束は忘れる捨てる雨柱

叱られる資格まっすぐアマリリス

東 英幸

父の郷とんと御無沙汰杜若  
青田風背中映写機回る音  
鱗には朝の光の鯨売り女  
魚市場市の終りの鱧の皮  
白人と並んで食べる鰻の日  
夏の蝶九十九里浜暮れにけり  
螢火を離れて人を待ちにけり

火箱 ひろ

尺取虫尺を取りとり逃走中  
ひらひらもひらりも飽きている金魚  
夜の窓を金魚大きくよぎるかな  
蚊遣香もくもく二十一世紀  
オキナワのころのくらやみ仏桑花  
羽抜鶏神も仏もなく平和  
初秋のキリマンジャロを一〇〇グラム

● 会員作品 ●

陽山 道子

夏の朝五體字類の紺表紙  
朝の庭まず一番の蜘蛛の糸  
弟はいまも弟茄子焼いて  
愛されて冷たくされてプチトマト  
八月や見たい知りたい伝えたい  
立秋のページさらさら赤い指  
眉描き足して新涼の朝ごはん

平井 奇散人

小春風彼のメールは仮定形  
我先に行く人見てる寒北斗  
困や低速ギアに切り替える  
冬河口これも鉄屑貨物船  
何もかも嚙下しかねる冬の朝  
冬の雲アトム空行く世紀です  
水鳥や仲間気にする若い衆